震災報道で地域紙が果たした役割
―宮城県の地域紙に着目して―

田中　早貴　（競技スポーツ学科　スポーツビジネスコース）
指導教員　的地　修

キーワード：東日本大震災　地域紙　I 新聞

1.　緒言

平成23年3月11日に宮城県牡鹿半島沖を震源として東日本大震災が発生した。宮城県石巻市、東松島市、牡鹿部女川町で配達されている地元夕刊紙「I 紙」は、津波による浸水や停電で、新聞を印刷する輪転機が動かない中、手書きで新聞を作り、避難所などの壁6か所に貼り出した。手書きで書かれたこの壁新聞は「地域紙と社会の絆を示した」と高い評価を受けた。

東日本大震災の報道を巡り、全国紙と壁新聞を作ってまで情報を発信し続けた地域紙のA新聞が果たした役割や使命にどんな違いがあったのか、また地域紙が取り組むジャーナリズムを考察し、全国紙と地方紙、地域紙のそれぞれの特性を考えた。

2.　研究方法

［調査方法］

・インタビュー調査

→I 新聞社

・報道部長

・その他、震災を取材した記者

→石巻市内の仮設住宅に住む被災者

3.　結果と考察

東日本大震災後は、全国紙、地方紙、被災地の地域紙がそれぞれ大々的に被災を報じたが、全国紙では、独自のニュース価値判断に基づいて紙面がつくられていた。福島の原発問題が大きくニュースになってから、国民の多くはその被害や情報について興味を持ち、東北の各地域、市町村がどうなっていたかということよりも、二次的な原発事故災害に関心が集まったため、これらがニュースの中心になっていた。一方、I 新聞は、復興を願う地域の被災者が生活に結び付いた本当にほしいと思うような地域に特化した情報を伝えていた。

4.　結論

全国紙に比べて地域紙は、被災者が知りたいと思う、地域の被害情報、安否情報、そして「生きること」を重視し、ライフラインの情報など地域に特化した情報を報じており、被災者にとって地域新聞は生活のよりどころとなっていた。

全国紙ではカバーできない細やかな情報伝達は、シビック・ジャーナリズムともいわれるが、大震災でみられた地方紙やブロック紙、県紙、地域紙の報道は、多様な情報社会のなかでそれぞれの特性を発揮した。全国紙が速報性と正確性を最大要件にした報道であったのに対し、地方紙や地域紙は正確性、公平性、必要性を最優先した。発行部数に大きな違いがあっても、それぞれの「伝える使命」に差異はなく、壁新聞の存在そのものが新聞ジャーナリズムの使命を考えるきっかけになった。

【主な参考文献】

・A 新聞　2011 年 4 月 26 日付
・A 新聞　2011 年 6 月 24 日付